Osaka University Knowledge Archive

Title	ヒンディー語とヒンドゥー・ナショナリズム : 1970～80年代の状況に関する覚書
Author(s)	拓, 徹
Citation	印度民俗研究. 2018, 17, p. 3-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68344
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ヒンディー語とヒンドゥー・ナショナリズム

―1970～80 年代の状況に関する覚書―

拓 徹

今日、単純に考えて、ヒンディー語はインドのヒンドゥー・アイデンティティーの一つの基盤となっているように見受けられ、こうした漠然とした印象から、私たちはともすると、ヒンディー語とヒンドゥー・ナショナリズムの間にも何らかの（歴史的・論理的な）関係があるのではないかと想像してみたくなる。では実際のところはどうなのだろうか。本稿は、この点について思考を巡らした若干の先達の議論を踏まえ、これに多少の知見を加えて考えてみた過程を綴った覚書である。

１．二つのヒンディー語：アーローク・ラーイによる問題設定

プレームチャンドの孫であり、英文学とヒンディー文学の両分野で活躍する批評家アーローク・ラーイは、「ヒンディー・ナショナリズム」をめぐるその刺激的な著書の中で、ヒンディー語を二種類に分けて議論している（Rai 2001）。この議論は、ヒンディー語とヒンドゥー・ナショナリズムの関係を考えるうえで、一つの土台を提供してくれているように思うので、本稿ではまずこれを簡単に紹介したい。

ラーイによる「二つのヒンディー語」を大雑把にまとめれば、一つは、「ウルドゥー語＝ムスリムの言語」との対比のもと、正統な「ヒンドゥーの言語」として高度にサンスクリット語化した排他的かつ単一的な「ヒンディー語」であり（ラーイの英語原文では、こちらの意味のヒンディー語はクォーテーションマークを付けて“Hindi”と表記しているので、これを踏襲し以下カギカッコ付きで表記する）、もう一つは、北インド各地の多様な方言・言語を許容し、実際に広く北インド民衆の間で共通語として機能しているところの、包容力と多様性に富むヒンディー語ということになる（こちらはクォーテーションマーク・カギカッコなしで表記）。

前者の「ヒンディー語」は言うまでもなく、ヒンディー語とウルドゥー語の両者を包含するカテゴリー「ヒンドゥスターニー語」を斥け、サンスクリット語起源のデーヴァナーガリー文字を使った「ヒンディー語」（＝ヒンドゥー教徒の言語）はペルシア語起源のナスタリーク文字を使った「ウルドゥー語」（＝ムスリムの言語）とは一線を画すると定義して、インド・パキスタン分離（＝二国家理論）の大きな一因となった考え方を体現している。また、この排他的な「ヒンディー語」の考え方は、父なる大地としての領

土・アーリヤ人の血を引く人種・サンスクリット語に象徴される文化の三つをその基盤とするサーヴァルカルらのいわゆるヒンドゥトヴァ思想＝ヒンドゥー・ナショナリズムに、文化面における土台を提供している。なお、ラーイがその著書で扱っているのは正確に言えば「ヒンディー・ナショナリズム」であって「ヒンドゥー・ナショナリズム」ではないが、以上の理由から、ラーイ自身が遠回しに示唆している通り、「ヒンディー・ナショナリズム」は「ヒンドゥー・ナショナリズム」に土台を提供している。ラーイがその著書で展開するのは基本的に、彼が「ヒンディー・ナショナリズム」として揶揄するカギカッコ付き「ヒンディー語」の歴史的検証とこれに対する批判であり、ヒンディー語が本来持っている多様性の擁護である。

カギカッコ付き「ヒンディー語」を擁護する勢力は、独立後のインドでヒンディー語の国語化を目論んだ。実際にインド憲法第343 条には、ヒンディー語と英語という二つのインド公用語のうち、英語に関しては 15 年間の試験期間後あらためてその処遇を定めるとの文言が入ったため、「ヒンディー語」擁護派は 15 年後（1965 年）に英語が排除され、ヒンディー語がインド唯一の公用語にして国語と化すことを夢見た。しかしよく知られているように、1950 年代後半のインドでは言語州問題が激化し、非ヒンディー語圏にヒンディー語を強要することの難しさが広く認知されたため、ヒンディー語・英語の二言語を公用語とする体制はその後も続き、現在に至っている。

では、ヒンディー語のインド国語化があり得なくなった現在、なぜあらためて「ヒンディー・ナショナリズム」について議論する必要があるのかとの問いに対し、ラーイは、インドでは現在も教育を通じて「ヒンディー・ナショナリズム」の弊が存続しているからだと答えている(Rai 2001: 119)。その背景には、1980 年代以降のインドでヒンドゥー・ナショナリズムが伸長し、インドの多数派であるヒンドゥー教徒の間で排他的な考え方、とくに反ムスリム感情が強まった風潮の陰に、ヒンドゥー的かつナショナルな言語として「ヒンディー語」を教えるインド教育の存在があるのではないかとの疑念があるものと思われる。

２.「二つのヒンディー語」の具体的展開：ダールミヤーによる演劇の事例から

現在 UCB 名誉教授のヴァスダー・ダールミヤーは、「ヒンディー文学の父」ハリシュチャンドラの思想におけるヴィシュヌ派ヒンドゥー教の近代性を分析した著書で知られているが、もともとは現代ヒンディー演劇批評を志していた人物であり、ヒンディー詩人・作家 Agyeya（अज्ञेय）生誕百周年の際には（この詩人と縁の深かった）UCB で記念シンポジウムを組織したりもしている(Dalmia 2012)。このダールミヤーが、ヒンディー演劇史をめぐるその著書でラーイの「二つのヒンディー語」説（ラーイ自身が自説をこのように呼んでいるわけではない）をもう少し推し進める記述を行っているので、次にその議論をざっと概観してみたい(Dalmia 2006、主に序章と第 4 章)。

ダールミヤーによれば、それぞれヒンディー演劇、現代ヒンディー演劇の草分け的存在であるハリシュチャンドラ（1850～85）とジャイシャンカル・プラサード（1890～1937）が（大衆的なパールシー演劇からの差異化の必要などから）むしろカギカッコ付き「ヒンディー語」による演劇を追求したのに対し、多様性を孕んだ民衆の言語（ヒンディー語に限らない）による演劇を追求したのが 1940 年代の IPTA（Indian People's Theatre Association）だった。IPTA の背景にはむろん、その直接の母体となったインド進歩主義作家協会（Progressive Writers Association of India、1935 年発足）の存在、および当時のインドの若い知識層に浸透しつつあった共産主義思想の存在があるわけだが、ダールミヤーはそこにさらに、19 世紀の西欧で始まり同時期のインドにも適用された「民俗」（folk）文化探求活動の歴史的結実をも見ている[1]。インド各地の民衆の間に存在する「民俗」的演劇に着目する視点が成熟していたからこそ、IPTA はときに「民俗」的演劇の形式を（そのメッセージ内容については換骨奪胎しつつ）そのまま借用し、インド民衆に直接訴えかける演劇活動を実現できたという

---

[1] レイモンド・ウィリアムズは英単語 folklore の初出を 1846 年と同定している（Williams 2015: 92-93)。これは民俗／国民文化もしくは「未開社会」文化に対する文化人類学的な探求方法の開始と時期を一にしていた。

わけである。

IPTAは1950年代に入るとインド共産党のプロパガンダ団体的な色彩を強め、次第に柔軟な創造力を失い消滅するに至ったが、その元来の強みは在野文化活動の自発性にあった。これに対し、独立後のインドで政府の側からインド各地の「民俗」文化をインド「国民」文化に組織・統合する意図の下に活動を開始したのがインド歌舞アカデミー（Sangeet Natak Akademi、1953年発足）であり、その傘下の国民演劇学校（National School of Drama、1959年発足、以下NSD）だった。ダールミヤーの主な論点は、1962年にNSDの監督に就任したアルカージー（Ebrahim Alkazi、1925～）の指揮下、ブレヒトの「叙事詩的（epic）演劇」の概念を導入することにより、インド演劇界では従来のメロドラマ的な演劇に対置される「叙事詩的演劇」としてインド各地の「民俗」的演劇の形式に注目が集まり、「民俗」的演劇形式を活用した新たな演劇活動が活発化するとともに、演劇活動の担い手であるインド中産階級知識人とインド民衆および「民俗」の多様性との間のコミュニケーションが活性化されたとするものである[2]。

本稿の主関心であるヒンディー語に話を戻すと、こうした1960～70年代の「民俗」への関心とこれに伴う各地方語による演劇活動の活発化は、ダールミヤーによれば、現地以外での上演活動の必要性などから各地方語による戯曲作品のヒンディー語への翻訳を促し、ハブとしてのヒンディー語の重要性を高めた（同時に、共通語としてのヒンディー語を介して各地方の戯曲家たちが互いの作品を参照し切磋琢磨することにより、インド演劇界全体が活性化された）。そしてそこには、印刷物として流通し「読まれる」場合の翻訳語としては英語が優先されるけれども、実際に上演し観客にアピールする必要がある場合の翻訳語としては圧倒的にヒンディー語が優先されるという、インド独特の言語事情が働いていた。ダールミヤーが文中で引用する英印文学・演劇批評家Aparna Dharwadkerも述べているように、世界有数の規模を誇

[2] なお、アルカージーは外国やインド各地の戯曲作品の翻訳・導入に終始し、NSDの所在地であるデリーにおけるヒンディー演劇活動の弱体化を招いたとする、ダールミヤーとは真逆の評価もある（Gaeffke 1978: 104）。

るインドの映画産業が生産する作品の言語は英語ではなくヒンディー語なのであり、この点は演劇においても事情は同じで、そこにはインドにおける言語的経験の構造が働いている。1960～70年代のインド演劇界における「ヒンディー語は実際、ある種の取り結び言語〔link language〕となったのだが、それは上から強要され、ほぼ例外なく嫌悪の対象となった“オフィシャルな”サンスクリット語化したヒンディー語ではなく、政府の許可や支援がなくてもボンベイ映画や大衆紙で使われ、また実際に話し言葉の中に頻繁に現れ流通している“多様な伝統の意味的資源を吸収した異種混交的でハイブリッドな言語”だったのである」(Dalmia 2006: 7)。むろん、政府の息がかかった NSD という文化機関がインドの多様な地方演劇をヒンディー語に収斂させようとする行為にナショナルな統合化の意図を読まないことは難しく、ダールミヤーもそういった批判が常に存在する事実に言及しているが(Dalmia 2006: 9)、彼女によれば、排他的な「ヒンディー語」擁護者たちがヒンディー語で創作された戯曲しか認めようとしない状況下、インド各地の文化伝統をヒンディー語の中に採り入れようとした当時の NSD の試みは明らかに「ハイブリッドで開放的な」ヒンディー語への情熱に支えられていた。ここでのダールミヤーの議論は、ラーイが述べた「二つのヒンディー語」が 20 世紀インドの歴史的ダイナミクスの中で具体的にどのように展開したかを例証する内容であるといえよう（ラーイの著書は排他的な「ヒンディー語」の歴史的展開の分析に終始しており、彼の言うところの多様性を孕んだヒンディー語についての具体例に欠けているが、ダールミヤーのここでの議論はラーイの議論をある程度補完するものとなっている)。

なお、1980 年代以降、インドにおける「民俗」の位置が微妙に変化し、インド文化が常に「リアリズムに基づく西洋文化／独自の伝統に基づくインド文化」の二項対立によって語られるようになった点にダールミヤーが言及していることを付け加えておきたい。

３.「二つのヒンディー語」説への疑義（１）: ニューシネマの事例

本稿はここまで、アーローク・ラーイが提唱した「二つのヒンディー語」説、およびその例証と考えられる事例について概観して来たが、筆者はじつは、20 世紀における歴史的なヒンディー語はそんなにきれいに「二つ」に分けられるだろうか、という疑問を持っている。以下、この疑義についてできるだけ具体的に述べてみたい。

ラーイとダールミヤーの議論では、ヒンディー語が持つ多様性・ハイブリッド性はインドの「民衆」、および彼らと真摯にコミュニケーションしようと試みるインド中産階級知識人の高いセンシティヴィティーの中に担保されており、これに排他的な「ヒンディー語」とそれを推進・擁護するヒンディー・ナショナリストが対置されている。筆者が持っている大きな疑問の一つは、独立後インドの教育を通じて、排他的な「ヒンディー語」はインドの「民衆」文化および中産階級知識人のセンシティヴィティーの中にも浸透しているのではないかという点である。

まず考えてみたいのが、1970～80 年代インドのいわゆるニューシネマにおけるヒンディー語の問題である。独立後インドのヒンディー映画界は、1950 年代から 60 年代初頭にかけて娯楽性とメッセージ性・芸術性を併せ持つ質の高い作品を数多く世に送り出したが（ビマル・ローイ、グル・ダット、ラージ・カプールなどの監督作品）、60 年代半ばになると、大衆受けを狙ってロマンス・コメディー・歌と踊り等の要素をパターン化して詰め込んだいわゆる「フォーマット映画」が増え、ヒンディー娯楽映画の質が大きく低下した。同時に、こうした娯楽映画界を見限り、フランスのヌーヴェル・ヴァーグ映画などの影響を受けて新しい映画を作ろうとする潮流が 60 年代末に芽生え、これが 1970～80 年代に成長してメインストリームの娯楽映画に対置され得る大きなうねりとなった。これが今日、ニューシネマ（別名パラレル映画）の名で知られる潮流である。ニューシネマの内実も多様で、ジェンダーやマイノリティーといった 70 年代末以降のインド社会運動が採り上げることになるテーマを多く扱ったシュヤーム・ベーネーガル（1934～）のような監督もいれば、主に中産階級の日常の委細を描くことが多かったバース・チャタルジー（1930～）の

ような監督もおり、単純化して語ることは難しいが、総じてニューシネマ作品が当時のインド知識層の（大衆向けに質の低下した娯楽映画では飽き足らない）表現へのニーズとセンシティヴィティーを反映していたということは言えるだろう。また、ギリーシュ・カルナード（1938～、カンナダ語戯曲作家。映画監督・映画俳優としても活躍）やヴィジャイ・テーンドゥルカル（1928～2008、マラーティー語戯曲作家。映画脚本家としても活躍）など、ダールミヤーが 1960～70 年代インド地方語演劇の代表的担い手として論じた戯曲作家の多くがニューシネマに作り手として関わっている点にも言及しておきたい。

ここで問題となるのは、ニューシネマ作品の多くが、当時の娯楽映画よりも（サンスクリット語化された）ヒンディー語を強調する傾向があった点である。例えば、ヒンディー映画界では、これが大衆娯楽として確立した 1920～30 年代の当初から映画のタイトルをローマ字、デーヴァナーガリー文字、ナスタリーク文字の三種類で並列表示する慣行が続いて来たが、筆者の知る限り、ニューシネマの嚆矢とされる 1969 年の有名な三作品のうち、少なくとも『彼女のローティー』（“Uski Roti”、Mani Kaul 監督〔1944～2011〕）と『大空一杯に』（“Sara Aakash”、Basu Chatterjee 監督）の二本でタイトルおよびクレジットが全てデーヴァナーガリー文字のみで表示されている。言葉遣いの面でも、例えばニューシネマのヒット作として知られる『拒絶』（“Aakrosh”、Govind Nihalani 監督〔1940～〕、1980）のデーヴァナーガリー文字による画面表示付きのナレーション部分（図 1）における विवाहित आदिवासी युवती（既婚の部族民女性）の語など、かなりサンスクリット語的なヒンディー語が用いられている[3]。

---

[3] 以上はニューシネマ作品のほんの一例に過ぎないが、多くのニューシネマ作品を鑑賞した経験のある筆者の印象では、概してこれらの作品ではサンスクリット語的なヒンディー語が用いられることが多い。むろんこれは印象論に過ぎず、正確な分析のためにはより多くの事例を提示する必要があるが、今回は時間の都合上、これを行うことはできなかった。

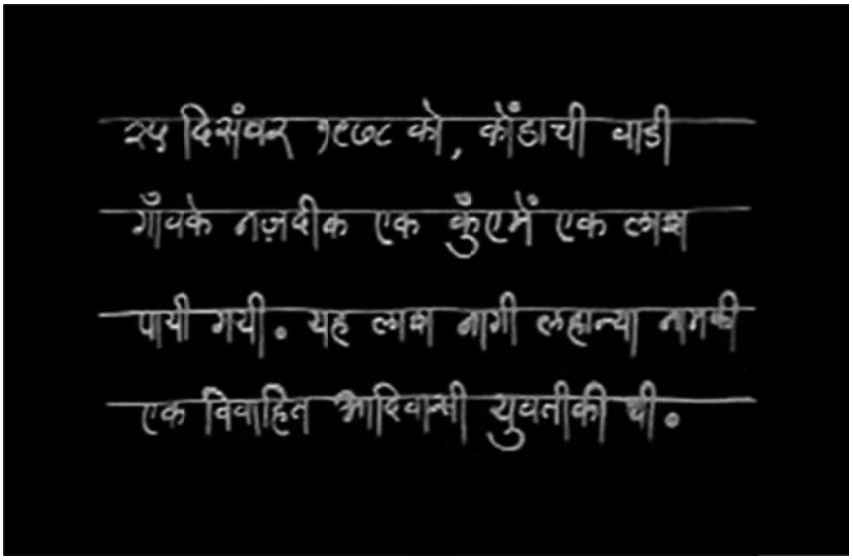

図 1　映画“Aakrosh”のナレーション部分画面

この図 1 の画面では、当時のヒンディー文学作品の表紙などにも見られる種類のややお洒落な手書きデーヴァナーガリー文字が用いられており、ニューシネマが当時のヒンディー文学などと知識人的なグラフィック感覚・感性を共有していたことも伺える。

このように、ニューシネマ作家の多くがよりサンスクリット語化したヒンディー語を用いた背景には、独立後インドの「ヒンディー語」教育を受けた世代、あるいはその少し前の、インド独立時の歓喜を若くして経験し「これからはヒンディー語が植民地時代の英語に取って代わるのだ」と比較的自然に考えることができた世代にとって、サンスクリット語化した「ヒンディー語」の使用と、よりリベラルかつ民主的な多様性を認める中産階級知識人のセンシティヴィティーが、必ずしも矛盾していなかった現実があるのではないかというのが筆者の憶測である。この憶測が正しいとすれば、それはサンスクリット語化した「ヒンディー語」の使用が、必ずしも（ヒンディー／ヒンドゥー）ナショナリズムと結びつくとは限らないことを意味し、ラーイの「二つのヒンディー語」の仮説は成り立たないことになる。

映画に関して「二つのヒンディー語」説への疑問をもう一つ付記するなら、サンスクリット語化された「ヒンディー語」とは明

らかに性質を異にするヒンディー娯楽映画におけるヒンディー語が、果たしてダールミヤーが述べたような「異種混交的でハイブリッドな」言語だろうかという点が挙げられる。1970 年代にニューシネマとはあらゆる意味で異なっていたヒンディー娯楽大衆映画の代表といえば、「怒れる若者」のイメージで登場し、スクリーン上の大スターとなったアミターブ・バッチャン主演の大ヒット諸作（“Zanjeer” 1973、“Sholay” 1975、“Deewaar” 1975、“Don” 1978 など）ということになるが、これらの作品の脚本が有名な脚本家コンビ「サリーム＝ジャーヴェード」によって書かれ、また彼らの書く独特の洗練された台詞とその歯切れの良い語感・リズムがこれらの作品の大ヒットにつながった事実はよく知られている。ここで「サリーム＝ジャーヴェード」の言語的特徴について分析する余裕も能力も筆者は持ち合わせていないが、それが北インド大衆に広く膾炙したヒンディー映画独自の（ヒンディー・ウルドゥー混交的な）言語伝統に根ざしていること、そしてこの伝統がある程度の高度な洗練と統一性を保っており、ダールミヤーが述べたような「民衆」的かつ「異種混交的でハイブリッドな」言語のイメージとはややズレていることについては、ほぼ疑いの余地がないと言えるだろう。

４.「二つのヒンディー語」説への疑義（２）: ヒンディー語メディアの現実

1970～80 年代のヒンディー語をめぐる最も大きな変化はおそらく、この時期にヒンディー語日刊紙が発行部数を大幅に増やし、この時期まではインドにおけるマスメディアの代名詞だった英字紙の部数を抜いてトップとなったことだろう。この発行部数の逆転劇は 1979 年に起きており、この時点でインドにおけるヒンディー語日刊紙の一日の発行部数が 300 万、英字日刊紙が 297 万であった。なお、この時期には、ヒンディー語紙に抜かれたとはいえ英字紙も発行部数を大幅に増やしている（この発行部数急上昇の背景には、当時の新聞経営のビジネス化革命があった）。ヒンディー語紙の発行部数はこの後も順調に伸び続け、1998 年には 2,430 万に達している（同年の英字紙発行部数は 750 万）。インドの急激な人口増加の要素を加味しても、インド人口千名につき発行される全日刊紙の数は 1972 年に 16 だったが、1998 年には 60

に増えている。インドでは明らかに年々より多くの人々の手に新聞が届くようになっており、そしてその増加分のかなりの部分がヒンディー語紙であることが想像できる。(Friedlander, Jeffrey, and Seth 2009: 190-191)

ヒンディー・ジャーナリズムの言語は、その記者たちが幼少時に受けた「ヒンディー語」教育を通じて、いわゆるサンスクリット語化したオフィシャルな「ヒンディー語」の影響をある程度受けているものと推測される。したがって、現在のインド「民衆」（識字率も年々向上している）のヒンディー語には、こうしたヒンディー・ジャーナリズムの浸透によって標準化された側面があるはずである（この傾向は、1980 年代初頭のテレビ放送開始、1990 年代以降の衛星チャンネル導入によってさらに加速していると思われる)。すなわち、インド「民衆」の多様かつハイブリッドなヒンディー語と、サンスクリット語化したオフィシャルな「ヒンディー語」とを対立させるラーイ・ダールミヤー仮説は、ここでもうまく当てはまらないのである。

こうした 1980 年代以降のヒンディー・ジャーナリズムの伸長は、いわゆるヒンドゥー・ナショナリズム政治の伸長と同時期に起きているとはいえ、その直接の関係を立証することはできない。強いて言えば、ヒンディー語紙とヒンドゥー・ナショナリスト政党 BJP（Bharatiya Janata Party、インド人民党）の主ターゲットが同じ都市部・高カースト・ビジネス関係者のヒンドゥー教徒であり、ヒンディー語紙の経営者の中にはデイニク・ジャーグラン紙のグプター一族のように BJP と親しくしている者もあるといった程度である (Friedlander, Jeffrey, and Seth 2009: 191-193)。1980 年代初頭のインドにおけるヒンドゥー・ナショナリズムの伸長自体が BJP ではなくむしろ国民会議派によって引き起こされ（堀本 1997: 20-22)、偏った報道によって当時のヒンドゥー教徒の反ムスリム感情を煽ったのもタイムズ・オブ・インディア紙のような英字紙だったことが知られており (Masud 1992)、一見もっともらしく思えるヒンディー語紙＝ヒンドゥー・ナショナリズムの等式は現実には成立しない。

５．結びに代えて

以上、本稿後半では、主に 1970～80 年代のインドの状況にラー

イ・ダールミヤーの「二つのヒンディー語」説が適用できるかどうかについて考察した。その結果、どうやらこの説はうまく適用できないということは分かったものの、本稿のテーマであるヒンディー語とヒンドゥー・ナショナリズムの関係については残念ながら、それがラーイ・ダールミヤー説が暗に示唆するほど単純ではないという結論を得たのみである。ダールミヤーが言及したように、1980 年代のインドでは学術界・ジャーナリズムを問わず「リアリズム・科学に基づく西洋文化／独自の伝統に基づくインド文化」の二項対立によってインドの過去と現在を再整理する風潮が蔓延し、これが本稿で述べたような文化活動やメディア環境における多様な変化と複雑に絡み合って、当時のインドにおける言語状況やナショナリズムの傾向を性格付けて行ったものと考えられる。その分析については今後の課題としたい。

＊

蛇足かもしれないが、最後に、現在のヒンディー映画におけるヒンディー語方言の使用状況について一言触れておきたい。

ヒンディー映画界では、1970～80 年代にメインストリーム娯楽映画とニューシネマ（パラレル映画）が乖離した状況が続いた後、90 年代に入って両者が融合する兆候を見せ始め、ある意味この融合の流れが昇華した 2000 年代後半のいわゆる新潮流映画（ニューストリームなどとも呼ばれる）の登場に至って、メインストリームのヒンディー映画の中に高度な表現力と芸術性を兼ね備えた作品が数多く生まれる新局面を迎えることとなった。こうした作品の中では、舞台となるそれぞれの都市や地方の文化的特徴にも細心の注意が払われることが多く、筆者が思いつくだけでも、劇中の使用言語がヒンディー語のそれぞれの地方（＝映画の舞台）の方言となっている映画は、“Band Baaja Baaraat”（2010）、“Gangs of Wasseypur”（2012）、“Dum Laga ke Haisha”（2015）など、枚挙にいとまがない[4]。

---

[4] 筆者には、各作品の劇中で使用されるヒンディー語がどうやら方言であるらしいという程度のことは分かるのだが、それがどの地方の何方言であるかを特定するほどの能力はない。以下では、

しかし今日、こうしたヒンディー語の多様性にヒンディー映画とその観客が注意を払うようになった事実は、ダールミヤーがかつてのインド演劇活動に関して想定したような、インド社会の異なる階層間における民主的なコミュニケーションや「通気の良さ」を意味するだろうか？

現在のインドでは、一方に BJP のモーディー政権下におけるヒンドゥー・ナショナリズムの激化とこれに伴うカースト・宗教間の軋轢増加の現実があり、これがヒンディー語の多様性に注意を払う高度な映画文化と併存するという奇妙な状況が存在している。ヒンディー語とヒンドゥー・ナショナリズムをめぐる状況は日々刻々変化しており、その関係のかたちには大変な多様性が想定し得るのであって、その分析にあたっては、各時代・各地方の細かい情勢変化をも計算に入れなければならないという事実が、あらためて想起される。

ウェブサイト・ブログでこの特定作業を行っている言語学者の高倉嘉男氏による各作品の使用言語に関するコメントを引用しておきたい。“Band Baaja Baaraat”（2010）:「サハーランプルからデリーにやって来たビットゥー〔ヒーロー〕からはサハーランプル方言が抜け切らず、デリー育ちのシュルティー〔ヒロイン〕はハリヤーンヴィー（ハリヤーナー州の方言）の影響の強いヒングリッシュ（ヒンディー語と英語のミックス）を話す。」“Gangs of Wasseypur”（2012）:「一応ヒンディー語映画の範疇に入るが、言語は極度に写実的である。ただし、映画の舞台となっているダンバードの方言ではなく、ボージプリー方言やマガヒー方言に近い言語となっている。」“Dum Laga ke Haisha”（2015）:「ハリドワールが舞台なだけあって、言語は現地のガルワーリー方言が使われていた。」（以上、2003～12 年の作品については同氏の HP『これでインディア』http://www.koredeindia.com/、それ以降の作品については同氏のブログ『バハードゥルシャー勝』http://www.bahadurshah.com/の各映画欄を参照。）なお、本稿では映画作品名の表記に当たってローマ字表記のみを用いたが、これはインドでローマ字による作品名表記が（今も昔も）最も一般的である点、および、デーヴァナーガリー文字を使うのであればナスタリーク文字も併記しないと政治的インコレクトになりかねないが、これは煩雑である点を考慮した結果である。

参考文献

堀本武功、1997、『インド現代政治史：独立後半世紀の展望』、刀水書房

Dalmia, Vasudha. 2006. *Poetics, Plays, and Performances: The Politics of Modern Indian Theatre*. New Delhi: Oxford University Press.

——— (ed.). 2012. *Hindi Modernism: Rethinking Agyeya and His Times*. Berkeley: Center for South Asia Studies, University of California.

Friedlander, Peter G., Robin Jeffrey, and Sanjay Seth. 2009 [2001]. "Subliminal Change': How Hindi-Language Newspaper Expansion Affects India', in Arvind Rajagopal (ed.), *The Indian Public Sphere: Readings in Media History*. New Delhi: Oxford University Press.

Gaeffke, Peter. 1978. *Hindi Literature in the Twentieth Century*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Masud, Iqbal. 1992. 'Print Media and Communalism', in Pramod Kumar (ed.), *Towards Understanding Communalism*. Chandigarh: Centre for Research in Rural and Industrial Development.

Rai, Alok. 2001. *Hindi Nationalism*. Hyderabad: Orient Longman.

Williams, Raymond. 2015 [1983]. *Keywords: A Vocabulary of Culture and Society*. New York: Oxford University Press.